

教育長賞

青木 悠嘉（あおき ゆか） 第七小 6年生

作品名:「いのちのギフト」を読んで

図 書:いのちのギフト

「あなたは、犬を飼いたいですか。」

そう聞かれたら私は迷わず、

「はい。」

と答える。でも、

「犬を最後まで責任をもって飼う自信はありますか。」

そう聞かれたら、私は少し迷ってしまう。

なぜなら、日本では年間四万頭もの犬が殺処分されているからだ。飼い主に捨てられ、保護犬となった犬達は施設に送られる。そこで、引き取ってもらえる犬と殺処分される犬の2パターンに分かれる。私はこのことを知って驚いた。犬を飼うということは犬の命を最後まで守ることだ、と私は考えた。

私がこの本を読んで一番印象に残ったのは「ペイフォワード」という言葉についてだ。誰かからいいことをしてもらったら、それをその人にお返しすることを「ペイバック」という。しかし、愛犬が死んでしまったらお返しは出来ない。そこで、愛犬にもらった幸せを他の犬や動物にむける「ペイフォワード」というお返しの方法がある。保護犬を施設から引き取ったり、それができなくても自分が出来ることを考えたりすればいいと思う。私は自分が出来る事を考えてみた。それは、野良犬を見つけたら施設に連絡をするということや募金に参加をするということ、学校の人たちにこの本を紹介して、自分が出来る事を考えてもらうこと、また犬を飼うと決めたら最後まで責任をもって飼うということだ。ささいなことだけれど、それが積み重なることで一匹でも多くの犬が殺処分されないようにできたらいいと思う。

私がこの本を読んでさらにすごいと思ったのは、殺処分ゼロを目指している国についてだ。ペットの先進国の代表であるイギリスでは1822年に動物虐待を防止する法律が、ドイツでは1881年に動物保護連盟が創立、1990年には「動物は物ではない」と規定している。その結果、ドイツは現在殺処分ゼロとのことだ。

私はひとつ疑問に思ったことがある。それは、ドイツでは殺処分ゼロなのに、どうして日本では殺処分される犬の数がこんなに多いのかということだ。私が思ったのは、ドイツ人に比べて日本人は犬を最後まで責任をもって飼うという意識が低いのではないかということだ。犬だって私達人間と同じ命を持っているのだから、犬を飼うということはその犬の命を預かるということだと私は思った。

私が将来犬を飼ったら、最後までしっかり責任をもって飼いたいと思う。